

# 幼稚園教育要領・保育所保育指針における 「絵本」の位置づけ

杉山 喜美恵  
(幼児教育学科)

## 要 約

保育において「絵本」は欠かせないものである。本稿では、保育所保育指針及び幼稚園教育要領において「絵本」がどのような位置づけであるかを明確にするために保育所保育指針解説及び幼稚園教育要領解説に書かれている「絵本」という言葉を手掛かりとして記述を読み解いた。

その結果、「絵本」という言葉は保育所保育指針解説では 80 ヶ所、幼稚園教育要領では 47 ヶ所見られた。それぞれの記述から「絵本」に求められる事柄を明確にした。

キーワード：絵本、保育所保育指針・幼稚園教育要領、保育

## はじめに

保育現場において「絵本」が欠かせないものであることは異論がないであろう。保育所、幼稚園、こども園など保育を行う場には冊数に多い少ないはあるにしても必ず絵本が置かれている。それはなぜか。多くの大人が乳幼児期の子どもたちにとって絵本がなんらかの役割を果たしていると考えているからではないだろうか。

では、保育において絵本に望まれている役割とは何か。本稿では保育所保育指針解説、幼稚園教育要領解説に書かれている「絵本」という言葉をキーワードとして、関連する箇所の記述を読み解きながら保育所保育指針、幼稚園教育要領においては、絵本をどのようなものと考え、どのようなことを期待しているのかを明らかにしたい。

また、筆者は、平成 31 年度より岐阜県教員免許状更新講習の選択領域として保育における絵本に関するテーマで講習を行ってきた。その際、受講者に絵本に関することで困っていることを尋ねたところ、選書に関する項目が最も多かった。保育所保育指針解説及び幼稚園教育要領解説の記述から保育における絵本に求められることを明確にしなが、絵本の選書についても何らかの私見を提示したいと思う。

選書といっても結局は、子ども自身が好きな絵本を読むことが大切なのであり、「絶対に読まなければならない」絵本が存在するわけではない。しかし、毎年 1,000 冊前後の絵本が出版されている、すなわち 1,000 冊前後の絵

本が増えていっている現状ですべての絵本に出会うことは不可能である。しかも自園や家庭に置くことができる絵本の冊数は限られている。絵本を自分で選ぶことが難しい年齢の子どもたちには大人が絵本を「手渡さなければならぬ」のであり、そこには必然的に「大人（自分のフィルター）」がかからざるを得ないのである。だからこそ、目の前の子どもたちにとってかけがえのない一冊となる絵本を選ぶ力も保育者に求められる専門性の一つであると考え。選書力を向上させていくためには、基本に立ち返り、保育所保育指針及び幼稚園教育要領に記されている絵本の位置づけを理解する必要があると考える。

## 1. 保育所保育指針解説・幼稚園教育要領解説 に出現する「絵本」の箇所及び数

絵本に求められていることを読み解くため、最初に保育所保育指針解説、幼稚園教育要領解説に書かれている「絵本」という言葉を機械的に抽出してみる。数だけで絵本の役割が明確にされるわけではないが、数が多いということは、その事柄についてより多く言及されていることを表している。

「絵本」という言葉は、保育所保育指針解説に 80 ヶ所、幼稚園教育要領解説に 47 ヶ所みられる。どこに書かれているかをまとめたものが、表 1 及び表 2 である。

幼稚園教育要領・保育所保育指針における「絵本」の位置づけ

表 1. 幼稚園教育要領解説における「絵本」の出現箇所及び数

章	節	項	要領	解説	計		
第1章 総説 (10)	(参考) (1)			①	1		
	第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(6)	(5) 社会生活とのかかわり		②	1		
		(9) 言葉による伝え合い	1 ③	4	④⑤⑥⑦	5	
	第4節 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価 (2)	3 指導計画の作成上の留意事項 (2)	(3) 言語活動の充実		⑧	1	
			(4) 見通しや振り返りの工夫		⑨	1	
第5節 特別な配慮を必要とする幼児への指導 (1)	1 障害のある幼児などへの指導 (1)			⑩	1		
第2章 ねらい及び内容 (36)	第2節 各領域に示す事項 (36)	3 身近な環境との関わりに関する領域「環境」(2)	[内容] (10)		⑪	1	
			[内容の取扱い] (5)		⑫	1	
		4 言葉の獲得に関する領域「言葉」(32)	[ねらい] (3)	1 ⑬	1	⑭	2
			[内容] (4)		1	⑮	1
			[内容] (7)		1	⑯	1
			[内容] (9)	1 ⑰	7	⑳㉑㉒㉓㉔㉕	8
			[内容] (10)		1	㉖	1
			[内容の取扱い] (2)		1	㉗	1
			[内容の取扱い] (3)	1 ⑱	14	㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	15
		5 感性と表現に関する領域「表現」(2)	[ねらい]			㊻	1
				[内容の取扱い] (1)		1	㊼
第3章 教育課程に係る教育時間の終了後等を行う教育活動 (1)	2 子育ての支援 (1)			㊽	1		
			5	42	47		

表 2. 保育所保育指針解説における「絵本」の出現箇所及び数

章	節	項	指針	解説	計			
第1章 総則 (6)	4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項 (6)	(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 (6)	オ 社会生活との関わり		①	1		
		ケ 言葉による伝え合い	1 ②	4	③④⑤⑥	5		
第2章 保育の内容	1 乳児保育に関わるねらい及び内容 (20)	(2) ねらい及び内容 (19)	イ 社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」(8)	(ウ) 内容の取扱い②		8	⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭	8
			ウ 精神的発達に関する視点「身近なものと関わり感性が育つ」(11)	(イ) 内容①	1 ⑮	1	⑯	2
			(イ) 内容③	1 ⑰	8	⑱⑲⑲⑲⑲⑲⑲⑲⑲⑲	9	
		(3) 保育の実施に関わる配慮事項 (オ) (1)			1	㉖	1	
		2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容 (18)	(2) ねらい及び内容 (18)	ウ 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」(5)	(イ) 内容③	1 ⑳	2	㉘㉙
				(イ) 内容④		1	㉚	1
				(イ) 内容⑤		1	㉛	1
	エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」(9)		(ア) ねらい③	1 ㉜	2	㉝㉞	3	
			(イ) 内容④	1 ㉟	3	㊱㊲㊳	4	
	ウ 内容の取扱い③		2	㊴㊵	2			
	オ 感性と表現に関する領域「表現」(4)	(イ) 内容④		1	㊶	1		
		(イ) 内容⑤		3	㊷㊸㊹	3		
	3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容 (36)	(2) ねらい及び内容 (36)	ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」(2)	(イ) 内容⑩		1	㊺	1
				(ウ) 内容の取扱い⑤		1	㊻	1
			エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」(32)	(ア) ねらい③	1 ㊼	1	㊽	2
(イ) 内容④					1	㊾	1	
(イ) 内容⑦					1	㊿	1	
(イ) 内容⑨				1 ㊿	7	㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿	8	
(イ) 内容⑩					1	㊿	1	
(ウ) 内容の取扱い②					1	㊿	1	
(ウ) 内容の取扱い③				1 ㊿	14	㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿㊿	15	
(ウ) 内容の取扱い③			1 ㊿	2	㊿㊿	3		
オ 感性と表現に関する領域「表現」(2)	(ア) ねらい		1	㊿	1			
	(ウ) 内容の取扱い①		1	㊿	1			
			10	70	80			

幼稚園教育要領解説において「絵本」は第2章の「ねらい及び内容」に多く見られ、領域としては「言葉」に多く見られる(表1)。第1章に「参考」としてあげられている学校教育法第23条の目標4には「日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。(下線筆者。以下同)」とあり、絵本が領域「言葉」と深く関連していることが読み取れる。次に多くみられるのは、「環境」、「表現」の領域である。

一方、保育所保育指針解説における「絵本」は、第2章の「保育の内容」に多く見られることは幼稚園教育要領解説と同じである。しかし、保育所保育指針解説の第2章「保育の内容」は、年齢別に乳児、1歳以上3歳未満児、3歳以上児に分かれている。乳児では3つの視点のうち、「精神的発達に関する視点」が最も多く、次に「社会的発達に関する視点」となっている。1歳以上児について保育の内容は、5領域に分かれており、1歳以上3歳未満児、3歳児ともに「言葉」の領域に多く見られ、次いで「環境」、「表現」となっている。

平成30年版の幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と3歳以上の保育におけるねらい及び内容は共通の内容となっているため、そこに書かれている「絵本」という言葉は幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説ともに同じものとなっており、比較対照したものが表3である。

次に幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説それぞれ「絵本」が書かれている箇所について具体的に見ていきたい。

表3.保育所保育指針解説、幼稚園教育要領解説における「絵本」の出現箇所の対照表

保育所保育指針解説		幼稚園教育要領解説	
	①		②
②	③④⑤⑥	③	④⑤⑥⑦
	④⑤		⑧⑨
	⑥		⑩
④⑦	⑧	⑬	⑭
	⑨		⑮
	⑩		⑯
⑤①	⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱	⑲	⑳㉑㉒㉓㉔
	⑰		㉕
	⑱		㉖
⑥①	⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚	㉗	㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟
	㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟		㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷
⑦⑥	㉟㊱	㊲	㊳㊴
	㊱		㊵
	㊲		㊶

## 2. 保育所保育指針及び幼稚園教育要領に出現する「絵本」

幼稚園教育要領解説及び保育所保育指針解説に出現する「絵本」を一語ずつ拾いながら、絵本の位置づけを考えていきたい。その際、前述した重複する部分(表3)については、保育所保育指針解説のところ述べる。

### (1) 保育所保育指針解説に出現する「絵本」<sup>ii</sup>

- ①【解説】1第1章 総則  
4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項  
(2)幼児期の終わりまでに育ってほしい姿  
(オ) 社会生活との関わり (P.73)

「保育士等は子どもの関心に応じて、絵本や図鑑や写真、新聞やインターネットで検索した情報、地域の掲示板から得られた情報などを、遊びに取り入れやすいように見やすく保育室に設定するなどの工夫をし、子どもの情報との出会いをつくっていく。」

指針の内容「・・・遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、・・・」の部分に情報を得るための媒体の例の一つとして絵本があげられている。幼稚園教育要領解説にも同様の箇所があるが、「保育士等」が「教師」、「子ども」が「幼児」となっている。

- ②③④⑤⑥【指針】1、【解説】4  
第1章総則  
4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項  
(2)幼児期の終わりまでに育ってほしい姿  
(ケ) 言葉による伝え合い (PP.80~81)

「保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」

豊かな言葉や表現を身につけるための媒体として物語とともに絵本があげられている。絵本はモノだが、物語はモノとは異なり並列的にあげられることには若干の違和感があるが、見るものとしての「絵本」、聴くものとしての「物語」という位置づけかと思われる。

解説では、4ヶ所で使用されているが、最初の2つは、指針の内容の再確認である。3ヶ所目は、「こもれび」ということばをあげながら「言葉による伝え合い」の具体例を示している。

絵本の中に出てきた言葉を絵本の中で終わらせるのではなく、日常生活の中で再現することにより、子どもたちの中で言葉の表す意味が実体験として感じられることの大切さが読み取れる。

「こもれび」のように日常的に使わない言葉はともすると生活から離れた言葉となりがちであるが、そのような言葉は保育士等まわりの大人がタイミングよく提示することで子どもの言葉との出会いとなる。普段の生活では使用されなくても日本にはこの「こもれび」のような情景豊かな言葉が絵本には多く見られる。そのような絵本を子どもたちと読むことは「絵本（4ヶ所目）や物語の世界に浸り込むことで、豊かな言葉や表現に触れられる」機会を子どもたちに与えることであり、言葉の美しい絵本を選ぶ能力を持つことが、保育者には必要とされる。

幼稚園教育要領解説と共通箇所である。

⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭【解説】8

第2章 保育の内容

1 乳児保育に関わるねらい及び内容

(2)ねらい及び内容

イ 社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」 (ウ) 内容の取扱い② (pp.108～109)

「絵本」は、この指針内容の解説に8ヶ所表れる。ここでは、乳児期の言葉の獲得過程と共に、子どもの言葉の獲得を促すために保育士等に必要とされる配慮が述べられている。

解説の後半部分では、保育士等と絵本を楽しむことの意義と活用方法が示されている。

「保育士等と絵本（⑦）を楽しむことは、こうした経験を重ねていくことでもある」の、「こうした経験」とは、クレーン、喃語の時期の応答的なやりとり、共同注意獲得時期の相互的なかわりなど「子どもの喃語や指さしなどを、保育士等が受け止め、共感し、言葉に置き換え伝えて」もらう経験だと考えられる。

絵本（⑧）は、「絵に描かれた状況や感情を共有することを通して子どもと保育士等のやり取りを生み出し、子どもの言葉に応じて、保育士等が言葉を補いながら楽しく言葉のやり取りを展開していくことを可能にする」と、絵本のアフォーダンスに言及されている。絵本の持つ役割として非常に重要な記述である。

3ヶ所目（⑨～⑭）以降は、「例えば、」という形で具体的な絵本の活用方法が述べられている。絵本で犬の絵を見た子どもが絵を指さし、「ワンワン」と言う。保育士等は「ワンワンだね」と子どもの言葉を受け入れ、さらに

「しっぽをフリフリしているね。」と続ける。「子どもは保育士等の顔を見上げて「フリフリ」と言う。」この時期の子どもにとってオノマトペはわかりやすく、いわゆるあかちゃん絵本と呼ばれるものには多く登場する。このように「状況を丁寧に語る」、すなわち子どもにわかりやすい表現を使って状況を語ることによって、子どもに新しい言葉との出会いをもたらす可能性に触れている。

絵本を読んだ後に散歩に出かけ、絵本に出てきたモノ（この場合は犬）を実際に観た際に「絵本のワンワンと一緒に。」と「実際の体験と絵本をつなぐ言葉をかけてみる。」とある。さらに散歩から戻り、再度、絵本を観ること（この場合は子どもが絵本を持ってくる）で、絵本の世界と実世界とを往還的につなぐことができる。絵本の世界と現実の世界がつながることは、今後の「ファンタジーを楽しむ力」、絵本の世界と現実の世界を自由に行き来し、豊かな想像力を育むことにつながっていくのではないかと考える。

そのために保育士等には、「このように絵本と言葉、そして実際の体験を重ね合わせる保育士等の援助は、子どもの言葉の獲得を促すとともに、子ども自身が言葉を獲得していくことを喜びとする感覚を育てていく。」とあるように豊かでタイミングよい働きかけが求められる。

⑮⑯【指針】1【解説】1

第2章 保育の内容

1 乳児保育に関わるねらい及び内容

(2)ねらい及び内容

ウ 精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」 (イ) 内容① (P.111)

「身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。」

子どもの生活を豊かにし、心身の発達を促すための物的環境の一つとして、生活用具、玩具と共に絵本があげられている。

保育士等に絵本を読んでもらっている時、知っているものの絵を見つけ、指差してその喜びを保育士等に伝える。また、気に入ったページを何度もめくって前後の展開を繰り返して楽しんだり、語りの声の調子やフレーズに耳を傾け、その音の響きやリズムに合わせて体を揺らしたり自分も声を出したりする。

解説には、この時期の子どもが絵本にどのように関わるか、そしてそのような子どもに保育士等はどのように関わるべきかが示されている。

どのような絵本を用意すべきであるかについては明確に記されていないが、「知っているものの絵を見付け」か



ら、子どもの身近な生活の中にあるモノの絵本、「音の響きやリズムに合わせて」から、音の響きが美しい絵本、言葉にリズムがある絵本が適していると考えられる。

保育士等が前述のような子どもの姿に「温かく応答し、その味わっている世界を共有する」ことによって身の回りの環境に対する興味や好奇心をかきたて、さらには意欲や人と関わる力などの非認知能力を育てることにつながると述べている。したがって、絵本には子どもの非認知能力を育てることが期待されている。

⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕ 【指針】1【解説】8

第2章 保育の内容

1 乳児保育に関わるねらい及び内容

(2)ねらい及び内容

ウ 精神的発達に関する視点「身近なものと関わり感性が育つ」 (イ) 内容③ (P.113)

「保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。」

この項目には短いながら指針、解説合わせて9ヶ所、「絵本」という言葉がみられ、絵本の役割について非常に大切な記述であることがわかる。

まず、「絵本を見る」という行為は基本的に一対一、保育士対子どものかかわりであるということである。近年、図書館等でのお話会や保育場面でも多数で絵本を楽しむ機会が増えている。しかし、元来、絵本は読み手と聴き手という一対一の関係性を想定して作られているものである。一対一の関係性においては、絵本を読んでもらうことが、「その絵や話の内容そのものだけでなく、保育士等とその子どもに対する愛情に基づいた願いや気遣いなどを、子どもが絵本の世界と一体的に受け止める経験」であると述べている。聴き手である子どもにとって、絵本を読んでもらう時間は、「自分だけの特別な時間」であり、松井直氏<sup>iii</sup>が述べたように読み手(親、保育士)を独り占めできるぜいたくな時間でもある。「絵や話の内容」とともに、読み手のあたたかなまなざし、やさしい声、体温など、体全体で感じる行為である。これは、この時期の子どもにとって、アタッチメントを通した「安全の基盤」づくりに通じるものであると思われる。つまり、「気持ちが高ぶる不安定な時に、保育士等の膝に乗せてもらい、落ち着いた優しい声とともに絵本に触れ、不安を受け止めてもらうことで、子どもの気持ちは安定していく」のである。したがって、この年齢の子どもたちができるだけゆったりとした一対一の時間が作れるような環境を構築することが求められる。

と同時に、子どもが「自らの感覚を研ぎ澄ましていく」ことを助けることも絵本の役割であると示されているが、その際も「(保育士等と)一緒に楽しむ」ことが前提とされている。さらに、「絵本の中に身の回りのものを見つけて、絵本のイメージの世界と日常の世界を行ったり来たりする経験」が、「ふりや見立てを楽しむその後の象徴遊び」につながっていくと述べられている。「絵本の中に身の回りのものを見付け」るためには、デフォルメされた絵ではなく、なるべく実物に近いものがよいと思われる。

環境を構成するについては、「一人一人の子どもの発達過程や興味を考慮した絵本やものを選ぶ」ことが大切であると述べられている。

㉖ 【解説】1

第2章 保育の内容

1 乳児保育に関わるねらい及び内容

(3) 保育の実施に関わる配慮事項オ (P.120)

担当の保育士が替わる場合の配慮事項について述べられている。すなわち、この時期の子どもにとっては特定の保育士等との密接な関係性が重要であるため、担当保育士が替わる際には引き継ぎを丁寧にすべきであることとし、引き継がれる情報の一つとして対象となる子どもが好きな絵本が遊び、玩具等とともに挙げられている。

㉗㉘㉙ 【指針】1【解説】2

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」

(イ) 内容② (P.148)

「玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。」

絵本が身近な物的環境の具体例として、玩具、遊具とともにあげられている。そして、絵本によって「自分なりの遊びの世界を豊かに広げていく」ことができる。それは、絵本で読んだイメージが前述した「ふりや見立てを楽しむその後の象徴遊び」につながっていくことだと考える。

㉚ 【解説】1

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」

(イ) 内容④ (P.150)

「自分のしたいことや今興味のあることをするのに適したお気に入りの場所を自分なりに見付けて、遊び込む」具体例としてあげられている。

③①【解説】1

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」

(イ) 内容⑤ (P.151)

身近な生き物についてのイメージを得る手段として映像とともに絵本が挙げられている。絵本等で得たイメージが実物に触れることでより具体的で豊かな認識になると述べている。前述の乳児保育(⑱～㉔)で「絵本の中に身の回りのものを見付けて、絵本のイメージの世界と日常の世界を行ったり来たりする」ことについて述べられていたが、この項では、イメージが現実の世界と結びつく例としてあらわされている。

③②③④【指針】1【解説】2

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (ア) ねらい

(PP.156～157)

「③絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。」

ここでは、「子どもが興味や関心をもって言葉に親しむことのできる」物的環境の例として詩、歌とともに「絵本」があげられている。さらに、「絵本や物語などに登場する事物や話の展開、言葉の響きなどを保育士等と一緒に楽しんだり」することで、言葉の意味するもの、話された内容を徐々に理解し、言葉で伝え合うことの喜びや言葉により心を通わせる楽しさを味わうと述べられている。したがってこの時期の絵本としては、モノの絵本から少しずつストーリーのある絵本へ、また、言葉の響きが美しい絵本が求められている。

③⑤③⑥③⑦③⑧【指針】1【解説】3

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (イ) 内容④

(P.161)

「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。」

解説では、絵本の役割をより具体的に述べている。たとえば、絵本や紙芝居は、新たな言葉との出会いをもたらすものであり、言葉や語彙を豊かにし、イメージの世界を広げるものとしている。さらに言葉の意味を理解することより、言葉そのものの音やリズムが持つ響きも面白さを楽しんでいるという。何度も気に入った絵本を保育士等に読んでもらいたがり、それによって耳慣れた言葉を自分から口ずさむようになり、さらには自分からその言葉を使うことを楽しむようになるという道筋が述べられている。

「三びきのこぶた」を例に挙げ、「友達と一緒に絵本や紙芝居のイメージをもって、ごっこ遊びを共に楽しむ経験」が子ども同士の心を通い合わせることに繋がると述べている。

③⑨④⑩【解説】2

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (ウ) 内容の取

扱い③ (P.167)

この時期が大きく言葉の習得が進む時期であることから、遊びや関わりを工夫することが必要である。「絵本」は解説の中に2ヶ所あらわれる。解説では、この時期、子どもが発した一言に込められた思いを保育士等が読み取り、言葉を補いながらやりとりする喜びを感じられるようにすることが大切であるとしているが、絵本を読む際も子どもが発する言葉をていねいに補い、応答的に関わることとしている。また、絵本などで聞いた物語を記憶し、イメージとして再現できるようになる。すなわちごっこ遊びを盛んに楽しむようになるとしている。この時期には絵本を文字通りに読むのではなく、絵本を媒介にしてやりとりを楽しみ、また、ごっこ遊びにつながるような絵本を選んでいくことが求められている。

④①【解説】1

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

オ 感性と表現に関する領域「表現」 (イ) 内容④

(P.173)

子どもが歌を口ずさむ場合として実体験と比較して絵本があげられている。

④③④ 【解説】 3

第2章 保育の内容

2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

オ 感性と表現に関する領域「表現」 (イ) 内容⑤ (P.174)

子どものイメージする力の育ちについての記述である。イメージする力が育ってくるこの時期の子どもと絵本の関わりがどのようなものであるかが述べられている。この記述には、この時期の子どもたちに適切な絵本の特徴が示唆されている。該当箇所を取り出してみる。

「イメージする力が育ってくると、この時期の言葉の育ちにも支えられて、保育士等に簡単なストーリーの絵本を読んでもらいながら、現実の世界を絵本の中に見いだしたり、絵本の世界を現実の世界で再現したりもし始める。また、繰り返しのパターンなどから話の展開をある程度予測し、先を楽しみにしながら聞くといった姿も見られるようになる。(下線筆者)」

すなわち、繰り返されながらも簡単なストーリーのあるもの、また、見立てあそびにつながるような絵本を選ぶことが期待されている。

④⑤ 【解説】 1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」 (イ) 内容⑩ (P.239)

日常生活の中にある文字や標識に関心を持つために、「自然に文字に触れられるような環境」として絵本があげられている。

④⑥ 【解説】 1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」 (ウ) 内容の取扱い⑤ (P.247)

絵本は、子どもが文字表現に関心を抱くことができる身近な存在であると述べられている。「数量や文字に関する指導は、子どもの興味や関心から出発することが基本」と述べられているが、子どもが絵本に興味を持てるような身近に絵本のある環境、また、「読んで」と持ってきた際に応えられる人的環境を整備することが望まれる。

④⑦⑧ 【指針】 1 【解説】 1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (ア) 「ねらい」 ③ (PP.248~249)

「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。」

解説には、子どもが絵本を楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付くことで言葉に対する感覚を豊かにしていくとある。つまりは、言葉の楽しさや美しさを感じられる絵本が望まれているということである。また、想像上の世界や未知の世界に出会える絵本もこの時期の子どもに適している。

④⑨ 【解説】 1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (イ) 「内容」 ④ (P.253)

保育所の生活の中で人の話を聞く場面の例として絵本があげられている。(「(保育士等の) 絵本を読むのを聞いたり、」)。人の話を聞くということは、一生涯を通じて必要とされることであるが、この力を身につけるためには、解説にもあるように「聞くことに関わる様々な体験を積み重ねる」ことが大切である。保育士等と子どもという一対一、あるいは読み聞かせ<sup>3)</sup>のように一対多で絵本を聞く場合もあるが、このような機会を持つことも人の話を聞けるようになるためには必要とされるであろう。しかし、この時期の子どもは「自分に興味のある事柄にしか注意を向けないこともある」ので、子どもの興味にあった絵本を選ぶことが大切になってくる。読み聞かせの際には特に、「聞くこと」を強要することがないよう配慮しなければならない。

④⑩ 【解説】 1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (イ) 「内容」 ⑦ (P.256)

子どもが楽しい言葉や美しい言葉に出会う場として絵本があげられている。「声として発せられた音声の響きや

リズムには、音としての楽しさや美しさがあり、言葉を覚えていくこの時期は、「言葉の音がもつ楽しさや美しさに気付くようになる時期」でもあると述べられている。言葉の楽しさや美しさを表す言葉の1つとしてオノマトペがあげられる。オノマトペはいわゆるあかちゃん絵本にも多く見られるが、幼児期では単なる音やリズムだけでなく、生活や事象のイメージと結びついた言葉としての美しさにも気づけるようになっていくのではと思われる。また、「相手や状況に応じて言葉を使い分けることが、言葉の楽しさや美しさに通じることがある」と述べられているようにやさしさや愛情等の感情と結びついた美しさにも気づけるようにしたいと考える。

⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ 【指針】1【解説】7  
第2章 保育の内容  
3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容  
(2) ねらい及び内容  
エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (イ)「内容」  
⑨ (P.258)

「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」

絵本の役割を語る上で非常に重要な記述である。この文言は、実習生が責任実習で「絵本の読み聞かせ」を行う際にねらいとして多くみられるものでもある。

この項目は、④⑦の内容であり、幼児期における絵本の世界に浸る体験の重要性について述べている。詳しくみていきたい。

「絵本や物語などで見たり、聞いたりした内容を自分の経験と結び付けながら、想像したり、表現したりすることを楽しむ」という子どもの特性を述べた上で、絵本を自分で読む、読んでもらうという二つのパターンを示している。ここで初めて「自分で読む」という言葉がでてくる。さらに、家庭と保育所を比較しながら、保育所の場合には、保育士等や友達と一緒に聞くことにより「皆で同じ世界を共有する楽しさや心を通わせる一体感などが醸し出され」、「保育士等や友達の興味や関心にも応じていく」ことにより、「家庭ではなかなか触れないようにも触れる」ことができ、幅の広いものとなると保育所で絵本を皆で読むことのメリットが述べられている。

絵本を「読み聞かせることは、現実には自分の生活している世界しか知らない子どもにとって、様々なことを想像する楽しみと出会うことになる。」と述べられており、登場人物になりきることで未知の世界を体験し、わくわくしたりドキドキしたり悲しんだり感動することができる

る。このように絵本は子どもの想像力を豊かにするために非常に重要な役割を担っている。

⑤⑨ 【解説】1  
第2章 保育の内容  
3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容  
(2) ねらい及び内容  
エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (イ)「内容」  
⑩(P.259)

文字などの記号の果たす役割に対する関心や理解を促進するものとして名前、標識、連絡、伝言、手紙とともに絵本があげられている。

⑥⑩ 【解説】1  
第2章 保育の内容  
3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容  
(2) ねらい及び内容  
エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (ウ)「内容の取扱い」②(P.261)

「皆で一緒に一つのまとまった話を集中して聞く機会」の例として、絵本や物語などのお話を聞く場面が取り上げられている。

さらに子どもが集中して聞くための環境構成、援助、姿勢についても触れられている。

⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ 【指針】1【解説】14  
第2章 保育の内容  
3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容  
(2) ねらい及び内容  
エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (ウ)「内容の取扱い」③(P.262)

「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。」

「絵本」という言葉が非常に多く使われている箇所である。また、選書、環境構成などさまざまな視点から絵本について書かれている箇所でもある。

絵本の内容と自己の経験を結び付ける、絵本を読み、さまざまな想像を巡らせることで言葉に対する感覚を養うことが望まれる。

その際、

- ・子どもが絵本に接している際、子どもなりの感じ方、楽しみ方を大切にすること
- ・子どもが絵本の楽しさを十分に味わえるよう題材や



子どもの理解力、興味関心を踏まえた選書をするこ  
 ・ 保育者と子どもの読み聞かせを通して心の交流が図ら  
 れること、また、複数の子どもたちに読み聞かせを行  
 う際には、一人一人が絵本の世界に浸り込めるよう落  
 ち着いた雰囲気を作ること、一人一人の子どもと絵本  
 の出会いが充実するよう子どもの動線を考慮した絵本  
 コーナーのあり方など環境構成にも言及されている。

⑩⑪⑫【指針】1【解説】2

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容

(2) ねらい及び内容

エ 言葉の獲得に関する領域「言葉」 (ウ)「内容  
 の取扱い」④(P.263)

お話の世界を楽しみながらいろいろな言葉に親しめる  
 ための方法として物語や紙芝居とともに絵本があげられ  
 ている。また、「語り継がれている作品は、美しい言葉や  
 韻を踏んだ言い回しなど子どもに出会わせたい言葉が使  
 われていることが多い」とし、「言葉を獲得する時期であ  
 る幼児期にこそ、絵本や物語、紙芝居などを通して、美  
 しい言葉に触れ、豊かな表現や想像する楽しさを味わう  
 ようにしたい」と述べられている。美しい言葉、豊かな  
 表現、テキストと絵の調和が子どもの想像を上げられる  
 ような絵本を選びたい。

⑬【解説】1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容 (2)

ねらい及び内容

オ 感性と表現に関する領域「表現」 (ア) ねら  
 い(P.267)

子どもの表現する活動の一つとして音楽を聴く、つく  
 る、かく、歌う、音楽や言葉などに合わせて体を動かす、  
 何かになったつもりになることとともに「絵本をみる」  
 ことがあげられている。

⑭【解説】1

第2章 保育の内容

3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容 (2)

ねらい及び内容

オ感性と表現に関する領域「表現」 (ウ) 内容の  
 取扱い①(P.278)

「子どもが興味や関心を抱き、主体的に関われるよう  
 な環境」の例として、「絵本、物語などのような子どもに  
 とって身近な文化財」があげられている。初めて絵本が  
 「文化財」であると示されている。

(2) 幼稚園教育要領解説に出現する「絵本」

①【解説】1

第1章 総説

(参考) 学校教育法第23条四(P.25)

「日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、  
 言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解し  
 ようとする態度を養うこと。」

言葉の使い方を正しく導く、相手の話を理解しようと  
 する態度を養うためのものとして、日常の会話、童話と  
 ともに絵本があげられている。物語ではなく、童話とい  
 う言葉が使われている。これは、学校教育法が作られた  
 年代との関連を感じさせる。

②【解説】1

第1章 総説

第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(5)社会生活とのかかわり (P.63)

③④⑤⑥⑦【要領】1【解説】4

第1章 総説

第2節 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

(9)言葉による伝え合い (P.70)

②から⑦は、保育所保育指針解説の①から⑥に該当する。  
 ただし、「保育士等」は「教師」と、「子ども」は「幼児」  
 と表記されている。

⑧【解説】1

第1章 総説

第4節 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

3 指導計画の作成上の留意事項

(3) 言語活動の充実 (P.111)

幼児が言葉に親しむための環境を工夫し、言語活動を  
 充実させるために遊びの中で意図的に取り入れる活動の  
 例として、歌や手遊び、しりとりや同じ音から始まる言  
 葉を集める言葉集め、カルタ作りなどとともに絵本や紙  
 芝居の読み聞かせがあげられている。

⑨【解説】1

第1章 総説

第4節 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

3 指導計画の作成上の留意事項

(4)見通しや振り返りの工夫 (P.113)

子どもが見通しや振り返りができるように工夫するこ  
 との解説において、活動の区切りや1日の生活の終わ  
 りに皆で集まる場面の具体例として「絵本や紙芝居を見た

りして楽しく過ごす一時」があげられている。それは、「担任の教師とのつながりを深め、担任の教師を通して学級の他の幼児のつながりもできていく」時間でもあると述べられている。

⑩【解説】1

第1章 総説

第5節 特別な配慮を必要とする幼児への指導

1 障害のある幼児などへの指導 (P.125)

障害のある幼児などに対する対応の具体例として、難聴の幼児に絵本を読む際の配慮事項が述べられている。

⑪から⑭までは、「第2章 ねらいと内容 第2節 各領域に示す事項」に出てくるが、それぞれ保育所保育指針解説の⑮から⑳に該当する(表3を参照のこと)。

④⑦【解説】1

第3章 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動

2 子育ての支援 (P.268)

幼稚園が、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすことが努力義務としてあげられている。現在、全国的に行われている子育て支援活動の具体例として保護者同士の交流の企画として「絵本クラブ」があげられている。

### 3. 保育において求められる絵本の役割

保育所保育指針解説及び幼稚園教育要領解説に現出する「絵本」という言葉を一つずつ拾いながら、記述を読み解いてきた。それらを踏まえて領域ごとにまとめてみたいと思う。

「絵本」という言葉が最も多く現れるのは、幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説共に、保育の内容に関する記述である。その中でも言葉の獲得に関する領域「言葉」において最も多く現出している。「言葉」以外の領域では、身近な環境との関わりに関する領域「環境」及び感性と表現に関する領域「表現」に見られる。ただし、領域に分かれるのは1歳以上であり、乳児保育においては社会的発達に関する視点「身近と気持ちを通じ合う」及び精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」に見られる。3歳以上の保育については、記述が共通しているため、保育所保育指針解説の記述を主にどのような役割が求められているのか、すなわち絵本の選書に求められるものについてまとめていきたい。

①乳児

保育所保育指針解説には特に乳児保育においては保育

士等のかかわりが重要であるため、主に保育士等の視点から述べられているが、絵本の条件という視点でみると乳児保育における記述からは、「絵本と言葉、そして実際の体験を重ね合わせる」ことができる、「知っているものの絵を見付け、指差してその喜びを保育士等に伝える」ことができる、「語りの声の調子やフレーズに耳を傾け、その音の響きやリズムに合わせて体を揺らしたり自分も声を出したり」できる、「絵本の中に身の回りのものを見付けて、絵本のイメージの世界と日常の世界を行ったりきたりする経験」ができる絵本が求められていると考えられる。すなわち、保育士等と子どものやりとりを生み出す(言葉の獲得を促す)、身の回りのものが出ている(象徴遊びにつながる)、言葉の音やリズムが美しい絵本と言い換えることができる。

また、「保育士等と一緒に絵本を見ることは、その絵や話の内容そのものだけでなく、保育士等のその子どもに対する愛情に基づいた願いや気遣いなどを、子どもが絵本の世界と一体的に受け止める経験でもある」と述べられており、この時期は、複数の子どもに対する読み聞かせという形ではなく、一対一のかかわりが求められている。そのためにも保育においてはゆったりと保育士等と子どもが一対一で絵本を読みあう時間と空間を確保できることが望ましい。

絵本は言葉の獲得を促すことが期待されているが、それはあくまでも保育士等の「言葉を補いながら楽しく言葉をやりとりする」、「温かく応答し、味わっている世界を共有する」かかわりが前提となり、子ども自身が「言葉を獲得していくこと喜び」を感じられるものでなければならない。一方的に読み聞かせるのではなく、「share books」という姿勢でなければならないと考えている。

この時期の絵本はいわゆる「あかちゃん絵本」や「ファーストブック」と呼ばれることが多い。具体的なタイトルとしてはガイドブック等も複数あるが、NPO「ブックスタート」が紹介している「ブックスタート赤ちゃん絵本30タイトル」、『父母&保育園の先生おすすめの赤ちゃん絵本200冊』<sup>1)</sup>など参考にできる。

②1歳以上3歳未満児

保育所保育指針解説の記述から、この時期の子どもが身の回りの絵本に興味をもち自分から関わろうとし、自分と他人の物の区別や、「お気に入り」の場所や絵本をみつけ、「ふり」や「つもり」が生まれてくる時期であることがわかる。

そのような時期にはどのようなことに留意して絵本を

選ぶことが大切か。「言葉そのものの音やリズムの響きもつ面白さを繰り返し楽しむことが多い」、「絵本などの物語を記憶し、それをイメージとして再現できるようになる」、「簡単なストーリーの絵本を読んでもらいながら、現実の世界を絵本の中に見出したり、絵本の世界を現実の世界で再現したり」、「繰り返しのパターンなどから話の展開をある程度予測」することができるようになることより、音やリズムの響きが美しい、繰り返しがあり、簡単なストーリー、ごっこ遊びに展開しやすいなどが絵本の条件としてあげられると考える。これらすべてを網羅しているものとして例をあげるならば、『おおきなかぶ』<sup>iv</sup>が代表的であろう。

### ③3歳以上児

3歳以上児の記述においてまず述べられているのが「文字への興味」である。多くの絵本には文字が書かれており、絵本を通して文字に興味を持つであろうことは推察できる。文字の指導に関しては、「習熟の指導に努めるのでは」なく、「自然に文字に触れられる」、「子どもの興味や関心から出発する」ことが大切であると強調されている。こうした子ども自身の自発性に支えられた文字への興味は「小学校における数量や文字の学習にとって生きた基盤となる」と述べている。

次に「言葉の楽しさ・美しさに気付く」ことである。日本語にはさまざまなオノマトペなど音やリズムに楽しさ、美しさのある言葉が多くある。また、日常で頻繁には使われなくても美しい言葉もある。保育者はテキストに書かれている言葉に関心を持ち、保育者自身も美しい言葉、豊かな表現や子どもに出会ってほしい言葉に対する感覚を磨くことが大切である。

「幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切なのである」と書かれているが、そのような体験ができる絵本を子どもに出会わせることが求められるということであり、これは非常に難しいことである。解説にも、「(想像する) 楽しさを十分に味わうことができるよう、題材や子どもの理解力などに配慮して選択し、子どもの多様な興味や関心に応じることが必要」とあり、このためには保育者自身がまず数多くの絵本に出会うことが必要だと考える。

また、「絵本が子どもの目に触れやすい場に置かれ、落ち着いてじっくり見ることができる」環境、「子どもの動線を考えた」絵本コーナーなど絵本環境を整備していくことも必要であると書かれている。

以上から、保育所保育指針解説及び幼稚園教育要領解

説における絵本は、以下のことが期待されていると考える。

- ・楽しい雰囲気での応答的なかかわりを生み出す
  - ・ものを介して身近な人と心を通い合わせる経験を作り出す“モノ”となることができる
  - ・子どもが自分に対する愛情を感じることができる
  - ・友達と同じ絵本を読むことで子ども同士の心を通わせることができる
  - ・新たな言葉との出会い、言葉の美しさ、楽しさに気付かせることができる
  - ・子どものイメージする力、想像する力を育む
  - ・身の回りのものに対する興味や関心を育む
- このような力を持つ絵本を選び、子どもとの出会いを作っていくことが望まれる。そのために次に必要となるのは、環境づくりと選書（保育者の絵本を選ぶ力の育成）であろう。環境については以下のことが望まれている。
- ・ゆったりとした雰囲気づくり
  - ・一人一人の子どもの発達過程や興味を考慮した選書
  - ・自分の居場所（ゆったりと絵本を読むことができる）という感覚をもつことができる場所の確保
  - ・自分から触れ、繰り返し遊ぶことができる環境
  - ・興味や関心をもって言葉に親しむことのできる環境
  - ・子どもの目に触れやすいところに置かれ、落ち着いてじっくり見ることができる環境

選書については、「発達過程」をキーワードとして考える一例を示す。発達には個人差があり、興味や関心も個人によって異なる。したがって発達にあった絵本は、一人一人の子どもに対して考えていかねばならないだろう。

「何歳になったらこの絵本を読みなさい」というきまりがあるものではない。それを認めた上で、絵本が自分というフィルターを通して子どもに手渡すものである以上、目安としての発達過程への理解は必要であると考えられる。

ひとつの例として「選ぶ」というテーマを考えてみる。

「選ぶ」をテーマとした絵本はいろいろあるが、『どーっちだ?』、『ねえ どっちがすき?』、『ねえ、どれがいい?』<sup>v</sup>の3冊をとりあげてみる。

『どーっちだ?』は、月刊予約絵本「こどものとも 0. 1. 2」シリーズの絵本であるが、「どっちの手にもっているか」を問うものである。ボードブック、背景が描かれていない、繰り返し、答えに対するヒント（ほぼ答えだが）が描かれているなど低年齢児向けの絵本の特徴を多く有しているが、「モノ」を選ぶ内容である。『ねえどっちがすき?』は、可視化されている「モノ」ではな

く、見えない「好み」を選ぶ内容である。『ねえ、どれがいい?』に至っては、選択肢が3~4あり、現実にはありえない(想像しなくてはならない)内容である。これは、極端な例ではある。未満児の絵本コーナーに『ねえ、どれがいい?』をおいてはならないわけではないが、スペースが限られている現状においては少なくとも優先順位については考慮する必要があるだろう。

### おわりに—今後の課題

保育における絵本を考えていくために、保育所保育指針解説、幼稚園教育要領解説の中に書かれている「絵本」という言葉を手掛かりにその位置づけについてまとめた。

今回は、やや機械的に「絵本」という言葉を抽出して要領・指針のどこにどのように記載されているかを明らかにしたが、記述内容を深く読み解くまで至ることができなかった。今後は記述内容をさらに吟味し、これらを踏まえて、絵本環境(物的環境)、発達過程を考慮した選書、人的環境としての保育者に求められる専門性、活動を広げる絵本などについて具体的に考えていきたい。

<sup>i</sup> 本稿では、以下の書を使用した。また、本稿におけるページ数は以下に示す該当書物のページ数である。  
厚生労働省編『保育所保育指針解説』2018.3、フレーベル館  
文部科学省編『幼稚園教育要領解説』2018.3、フレーベル館

- <sup>ii</sup> 四角で囲った記述は、「絵本」が出現する順番をしめした丸数字  
【指針】…保育所保育指針解説における指針本文  
【解説】…同上における解説部分  
※それぞれの後に続く数字は記載されている数
- <sup>iii</sup> 松井直著『松井直自伝—軍国少年から児童文学の世界へ』シリーズ・松井直の世界1、ミネルヴァ書房、2012.1 P19~20、母の読み聞かせ
- <sup>iv</sup> 「読み聞かせ」という言葉については与える印象より議論を呼んでいる。筆者も「読み聞かせ」という言葉をあまり使用せず、「子どもと絵本を楽しむ」ということが多いが、本稿では一般的に定着していること、解説書の中で使用されていることを考慮し、複数子どもたちに保育者等が絵本を読むことに対し「読み聞かせ」という言葉を使用する。
- <sup>v</sup> 詳しくはNPOブックスタートのホームページを参照されたい。  
絵本ナビ監修『父母&保育園の先生おすすめの赤ちゃん絵本200冊』、2019.5、玄光社
- <sup>vi</sup> A. トルストイ再話、内田莉沙子訳、佐藤忠良画『おおきなかぶ』、1966.6 福音館書店
- <sup>vii</sup> 植垣歩子『どーっちだ? (こどものとも0.1.2)』、2007.3、福音館書店  
安江リエ文/降矢奈々絵『ねえ どっちがすき?』、1998.9、福音館書店  
ジョン・バーニンガム作/まつかわまゆみ訳『ねえ、どれがいい?』1983.12、評論社

## The Position of "Picture Books" in Course of study for Kindergarten, Guideline of Daycare Center

SUGIYAMA Kimie